日本の伝統的な自然観を地球の未来社会に生かす

安成哲三
総合地球環境学研究所所長

日本人のノーベル賞受賞科学者の多くから「日本人だったからこそもらえた」という言葉を聞いている。この意味は、欧米の研究者にはない日本人固有の発想と独創性があったから評価されたということである。では、それらはどこからきているのか。

日本列島は、四季折々に変化するモンスーン気候や山と谷、平野、海岸などが複雑に入り組んだ地形、そしてそれらによる多様な生態系に恵まれている。一方で、地震、津波、火山、台風などの自然災害にも悩まされてきた。このような自然を生かしながら、あるいは折り合いながら、私たちの祖先は縄文のころから水田稲作農業を築き上げてきた。この水田稲作は、自然をある程度改変しつつも、その恵みを受ける仕組みとして、里山という人為的自然とそれに伴う文化を築いてきた。その過程で、まさに「自然とともに生きる」という考え方が日本人には当たり前のものとして培われてきた。

約270年続いた江戸時代の鎖国は、限られた資源や自然の恵みをいかに無駄なく持続的に活用するかという工夫がなされ、江戸や大坂・京都という都市を含め、自然の循環の中で生きていく知恵と思想がさらに培われたといってもいい。このような日本人の自然観は、欧米人とは異なる発想を生み出す源になっているとも考えられる。

自然と一体になって日本人が生きてきたことを示す文化の一つが俳句である。季語を入れることにより、四季折々の中での人が自然と向き合いながら生きている姿が17文字の中に表われているが、それは論理というより人間と自然の一体感の表現そのものといえる。俳句が江戸時代に発達したのも、自然と共生する循環型社会に人々が生きていたからかもしれない。

一方、西欧で発達した近代科学では、自然は利用し、制御する対象であり、人間と自然は対立的な関係であった。明治以降、日本は、近代科学に基づく産業を発達させ、20世紀後半には世界第二の経済大国にまでなったが、同時に大気・水汚染などの公害問題を引き起こすことになった。現在、さまざまな環境問題を克服しつつ、より人間らしく生きるための「持続可能な開発」という概念が提唱されているが、人間と自然の対立関係を前提とした近代科学の発想のみでは、根本的な解決ができるとは思われない。人間も地球の自然の一部として、他の生物と共に生きる存在であるという、日本の伝統的な自然感を、如何に科学技術に生かし持続可能社会を作ることができるか。地球社会における私たち日本人の役割が今、問われているのではないか。

◉やすなり・てつぞう
1947年、山口県生まれ。京都大理学研究科博士課程修了。筑波大地球科学系教授や名古屋大地球水循環研究センター教授などを歴任後、2013年、総合地球環境学研究所所長に就任。専門は気候学・気象学。現在は、地球環境を包括的に調査分析する地球環境学の分野でも活動。秩父宮記念学術賞、水文・水資源学会国際賞など受賞多数。